

1 研究主題

ともに楽しむ授業づくり
 ～ 分かる、できる、全員参加の楽しい授業を目指して ～

2 研究の具体

(1) 『綾川きりっと6か条』を基盤とした指導の展開

学習規律及び行動規範として整えた『綾川きりっと6か条』を、学びに向かう構えを醸成する基礎・基本として共通認識し、意味理解と価値認識の浸透に努めながら、生徒への学校生活全般での汎用を意図した指導を展開する。

(2) 学習過程の工夫

「解決する必然性のある学習課題→目的意識のある学び合い、成長を実感する振り返り」による学習過程を意図的に仕掛け、より深い学びへと導く効果的な指導方法や手立てを工夫する（以下①～④の内容の共通理解を図り、共通実践を行う）。

① 「解決する必然性のある学習課題」の設定

- 「行動目標（～しよう）」ではなく、「内容目標（なぜ（どうすれば）～なのだろうか？）」で設定する。
- 生徒の“なぜ？”“どうして？”を起点に追究・探究へと導く主発問として位置付ける。

② 生徒が自分で「選択・判断」する場面の位置付け

- 「選択・判断」したことに対する意見や考えの構築、学び合いの中でその差異の比較・検討、自分の考えを整理するとともに構築し直すなどの時間を大切にする。

生徒が「選択・判断」する場面

学習活動2において、どの方法（思考ツール）で分析するか、何（端末上 or ペーパー）で分析するかを選択させ、それぞれに適した学習の進め方ができるようにする。さらに、学習活動3(1)において「どのポスターが最も優れているか」を、観点を明確にして判断する活動を取り入れることで、「友人はどんな観点で、どのポスターを選んだのだろうか」という知的好奇心を刺激し、後の対話活動の活性化をねらう。

【指導案に「選択・判断」する場面の詳細と協働的な学びとのつながりについて明記（国語科における実践例）】

③ 学習課題の解決に向けた「目的意識のある学び合い」

学習課題（主発問）にさらに迫ったり深めたりするための追発問を位置付ける。


- 自分の考えを整理して説明する力や聞く姿勢、聞く力を高めるための手立てを講じる。
 ex. 根拠・理由をもとに考える指導、思考ツールの活用等
- グループでの学び合いでは、その目的や方法を明確にして、それに応じた教科の支援活動を大切にする。
- 一斉指導における学び合いでは、机間指導で把握した生徒の考えを意図的指名により共有するとともに「見える化」して取り上げ、全員の思考が広がり、深まるようにする。

④ 「まとめ」と「振り返り」の違いを意識した「成長を実感する振り返り」

- 「まとめ」は、“なぜ？”“どうして？”を起点に、設定した学習課題に対して、主体的・協働的な学びを通して解き明かした内容を整理したものである。 ※全員共通
- 「振り返り」は、本時の学びで得た内容や驚き、自己変容の認識、成長を実感したこと、新たな疑問やチャレンジ意識等を文章化することで、終末の指導につなげるものである。 ※一人称
- 前時の生徒の「振り返り」を活用して、本時だけでなく次時の課題設定へとつなぐなどの工夫をして、「振り返り」の価値を高める。

「綾川きりっと6か条」

- 一 「整理・整頓」すっきりと
- 二 「準備」済ませて休憩時間
- 三 「3分1分ゆとりをもつて
- 四 「あいさつ」姿勢「集中力」
- 五 「聞く」は学びのスタートライン
- 六 「学び合い」して学力アップ




3 研究の検証及び改善の手立て

今年度5月と11月に実施した生徒対象のアンケートでは、1項目を除き肯定的回答の割合が若干程度の項目もあるが高くなった（「授業の内容がどの程度分かりますか」は横ばい状態）。しかし、数か月の実践では大きな変化や改善は見られなかったことから、学力・学習意欲の二極化（多極化）改善に向けた教職員研修の充実や授業改善等に継続的に努める必要性を改めて感じている。

ただ、「ICT機器の使用」に関しては、以下のグラフから5月と11月で大きな変化が見て取れる。何らかの対象を分析する際にペーパーを用いるか端末上で行うかを個人で「選択・判断」する場面の設定、自力解決の際に他者の考えを参照しながら学ぶことのできる環境の整備、協働的な学び（共同編集等を含む）に活用するなど、教師自身がICT機器を使用するよさを実感し、授業に取り入れている様子が日々の実践からうかがえる。文科省が提唱する「文房具的活用」を目指し、今後更なる有効活用の場面を探っていきたい。

